

講義録

第1回講座「川崎臨海部の歴史」

日時：平成17年11月9日（水） 18:30～20:30

会場：川崎区役所7階第1・2会議室

講師：長島保



講師略歴

県立川崎高校で長年教鞭を取る。郷土史研究家。退職後は市民アカデミー、市民館の工事、歴史散歩サークルの指導などに関わり、川崎市史の編纂にも関わる。現在はNPO法人多摩川エコミュージアムで精力的に活動。川崎産業ミュージアム専門委員。

【前置き】

皆さん今晚は。私は長年教師をやっていたものですから、立っていないと喋れません。気合が入らないんです。

最初にお断りしなくてはいけないのですが、今日の話はチラシやレジメでは『京浜臨海部の歴史総論』となっていますが、内容は川崎だけです。「京浜」というと本来、横浜も含めて考えなければならぬのですが、横浜まで広げてしまうと時間も足りませんし、話の組み立ても考え直さないといけません。ですからここでは、『京浜臨海部』ではなく『川崎臨海部』の歴史ということでお話させていただきたいと思います。

【京浜工業地帯発祥の地、川崎】

京浜工業地帯発祥の地は実は川崎なんです。2007年は明治製糖の前身である、横浜精糖の川崎工場が操業してから100年になります。どこにあったかといいますと、川崎駅西口の多摩川の岸边にありました。あそこには明治製菓もありましたが、これは大正時代に、明治製糖の子会社として出来たものです。明治製糖は10数年前まで続いていましたが、その跡地は今、『かわさきテクノピア』と呼ばれる街区になっています。明治製菓跡地には『ソリッドスクエア』という大きなビルが建っています。これらの土地の隣には、今再開発が進行中の元東芝の堀川町工場、のちの東芝の川崎事業所だった土地があります。東芝の閉鎖後しばらく更地でしたが、1年かけて土壌改良をし、今建設事業が始まっています。東芝の前身である東京電気が川崎にきたのは横浜精糖がきた2年後です。あの辺りが、京浜地帯が工業地帯化して行く最初なんです。

私は、本来ならばあそこに『工都川崎発祥の地』を示すモニュメントないし、記念碑を建てて然るべきだと思うのですが、再開発の際には整備されませんでした。あの付近には市の『産業振興会館』もあるので、少なくともその玄関前にあたって良いのではないのでしょうか。「2007年は川崎の工業化が始まって100年になるのだからモニュメントを建て、イベントでもやったらどうか」とある方々には申し上げます。実現すると良

いと思います。それもまた産業ミュージアムの大事な資源になるはずです。

最近、川崎に近代工業がきたのはもっと前、明治 21 年に戸手の河原に横浜煉瓦製造所（御幸煉瓦製造所）が出来たのが最初という説もあります。しかし私は、工業地帯形成の元になったという意味で、横浜精糖や、東京電気が来た時の方が良いと思っています。

今申し上げた横浜精糖や東京電気のあった場所は、実は川崎区ではなく、行政的には幸区になります。当時は御幸村向河原。余談ですが、現在の川崎駅も大部分は幸区です。市民の方は意外と知らない。よく間違えます。最近できましたミュージアも幸区。ともかく私たちの歴史に対する認識は、案外ちょっとしたところが行き届いてないところがあります。

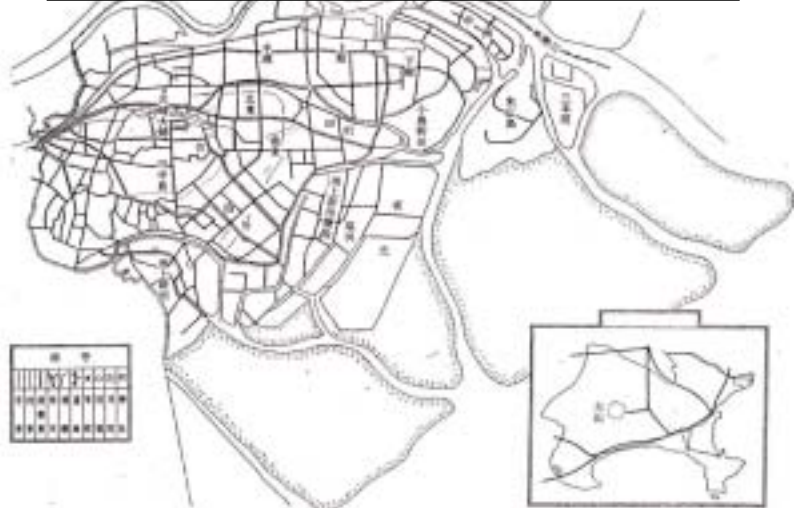
川崎駅付近の多摩川沿岸から始まった工業化は、川崎区の方へ広がっていきます。まず『日本コロムビア』（当時は前身の日米蓄音機商会）がきて、『味の素』がきて、『富士製鋼』がくるなど、多摩川沿岸に近代工場が軒並み進出します。多摩川沿岸が使えなくなってくると、「もっと大きな工場を臨海地帯に建てていこう」ということになり、『日本鋼管』がやってくる。『浅野セメント』もくる。そして、更にもっと多くの企業を呼ぼうということで、浅野総一郎が膨大な埋立地の形成を始めます。

【川崎臨海地帯の土地の成り立ち】

かつての川崎臨海地帯には大変豊かな自然がありました。そしてその自然を資源に第一次産業が展開されていました。もともと川崎の臨海地帯は、多摩川の上流から押し流されてきた土砂が堆積して出来た三角州の上に形成された地域です。川崎は、多摩川とは切っても切れない関係にあり、『川の先の方だったから「川崎」と呼ばれるようになった』のかもしれませんが。ただ「川崎」とい地名は川の先に限らず、中流域でも「川崎」という地名があります。どうしてかという、『前』という字が『さき』とも読めます。川の前という意味で「川崎」という地名になった場合もあるようです。

川崎の海岸線には非常に広大な干潟がありました。資料 1 は大正 11 年に修正測図した 5 万分の 1 の川崎南部の臨海地帯の地図です。干潟が点々で書き込んであります。（別紙、コピーで薄く見難くなっている）資料 2 は明治～大正期の大師河原村の地域図ですが、海岸の方、点々で囲ってあるのは全て干潟です。当時は干潮時、干潟が 1.5～2km の沖合いまで広がっていました。こういう状況はその隣の田島村でも同じでした。発達した干潟には、内陸から入り込んできた川が澇筋（みおすじ）をつくっていました。あとでまた話しますが、この澇筋を通して内陸の河川から海苔養殖のベカ舟なんかも海に出ていきました。

資料 2：大師河原村の地域図（明治～大正期）



〔川崎漁業協同組合編『海』から〕

【江戸時代 磯付村だった川崎臨海地帯】

江戸時代、海は幕府が管理していました。幕府は専門漁師のいる「浦方（うらかた）」というのを決め、漁業をする特権を与えていました。この辺りでは羽田に「獵師町」がありました。獵師町の「獵」は「さんずい」の「漁」ではなく、「けものへん」の獵です。少し先の生麦村にも獵師町があり、さらに先には神奈川宿の神奈川、東京の方では大井に獵師町がありました。そのほかの海辺に面していた村は磯に付いている村ということで、「磯付村（いそつきむら）」といいました。「磯付村」は漁をしても良いんですが、捕ってきた魚介類を売ってはいけません。つまり自家用としてのみ漁を許されていました。しかし、もともと土地が悪く、せいぜい5反前後の田畑しか持ってないような家々は、副業をしなければなかなか暮らせず、次第に捕ってきた魚介類を周ってきた問屋などに売るようになります。でもそうすると、獵師町が怒ってしまい、訴訟問題になりました。羽田村が川崎の磯付村、小田村や渡田村、大師河原村などを幕府の評定所に訴えた訴状などが残っています。当時の漁業の様子が分かって大変面白い資料です。しかし、訴えられながらも磯付村は、自分たちが沖へ行ける既得権を徐々に拡大していく闘いをやっていきます。

【明治～大正 海苔漁業の盛衰】

明治になると海は公有水面になり、政府は各県を通じて海面を管理しました。県に届けを出して許可を得れば、利用も埋立ても出来るようになります。そして、明治4年に大師河原村の人たちが、品川や大森の海苔漁業に学んで海苔養殖を始めます。川崎大師平間寺の境内にある「海苔養殖の碑」には、川崎の海苔養殖の4人の先駆者である石渡四郎兵衛（いしわたしろうべえ）や川島勘左衛門（かわしまかんざえもん）、桜井佐七（さくらいさしち）などの名前が刻まれています。最初の海苔養殖が成功すると、そのほかの村びとたちもそれになって、次々に海苔漁業を始め、大正年間には海苔養殖をする農家の数は数百軒にものぼりました。資料3は川崎漁業協働組合が、解散した時に編集した記念誌『海』からとらせていただいた「大師河原での海苔業者の移りかわり」です。集落毎の海苔漁業者数の変遷を見ますと、明治末期から大正にかけ、急激に漁業者が増えていくことがわかります。こうして大師地域の海苔は、県第一、東京湾でも有数の海苔場にまでなっています。

海苔漁業というのは冬場の仕事で、12～翌年4月頃が採取時期です。寒風が吹き付ける中、沖に立ち並んだ「ひび」に付いた海苔をベカ船と呼ばれる小船で採取する作業は、手が凍えるつらい作業でした。手を温めるために、自分の小便をかけたそうです。正月も返上して海に出ることもあり、非常に厳しい労働でした。

いくつかの写真が資料7にあります。まず、出漁の写真。こんなに小さな船です。その右にはベカ船に乗り、網ひびから海苔を取っている写真もあります。どちらも大変貴重な写真です。当時のカメラはとても高価で、持っている人も少ない。資料にある写真はどれも戦後の写真ですが、私は戦前の海苔漁業の写真というのはまだ見たことがありません。

海苔漁業は、資材にお金がかかります。竹ひびや網ひびの「ひび」や船など揃える必要があります。その費用を稼ぐために大師の人たちは、夏場に園芸農業の、梨栽培を始めます。その中で明治26年に当麻辰次郎（とうまたつじろう）が『長十郎梨』を育成します。

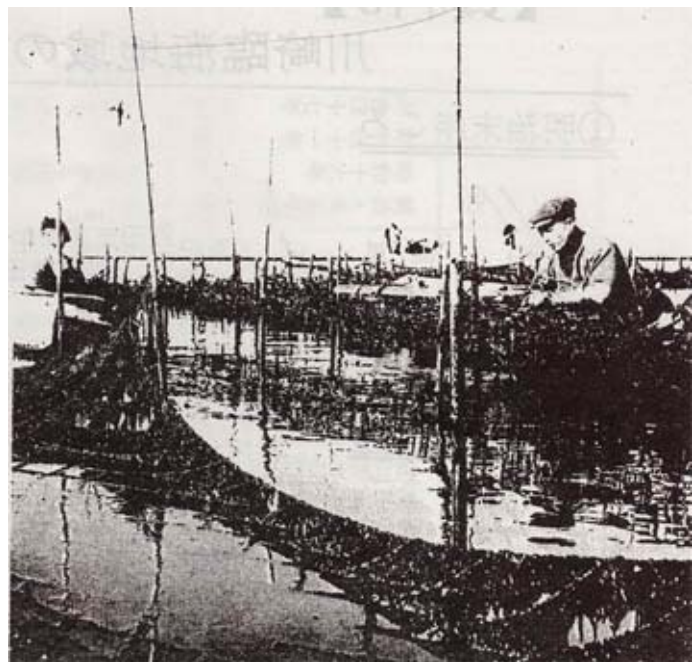
これが後に多摩川梨の象徴になり、やがて全国にも広がって、一時期は全国の梨の6~7割は長十郎だったといわれるくらい盛んでした。

当時の海苔漁業は海苔干しなど何かと人手も要りました。家族労働だけでは足りず、季節労働者を雇っていました。東北や北関東から、農閑期には多くの出稼ぎ人がきており、多くの家で、5・6人の人たちを雇っていました。

戦後になるとどんどん埋立てが進められ、海苔養殖は徐々にその漁場を失います。最終的には東扇島の埋立てで海苔養殖は完全に出来なくなり、1972年に川崎の海苔は終わります。海苔をやった人たちは皆陸に上がって転業しました。中には共同出資してゴルフ場を経営したり、ガソリンスタンドをやった人もいたそうです。とにかく、川崎に工場がくる前に、自然の恵みを上手く利用して盛んになった産業でした。海苔漁業のことを伝える記念碑は、川崎大師の境内のほか、東扇島の川崎マリエンの後ろの公園にも立派な碑が建っています。ただ、あそこは行く人が少なく、知らない人が多いようです。



出漁するべか船
かわさき市民ミュージアム変
『海と人生』から



海苔摘み(大師沖) 川崎漁業協同組合編『海』から

資料3：大師河原での海苔漁業者の移り変わり〔川崎漁業協同組合編『海』から〕

部落	のり	貝・うなぎ・ボサアミ	河岸	鎮守	祭礼月日
中原	明治末期 40 軒 大正年間 26 軒 昭和初期 15 軒 昭和 21 年 10 軒 昭和 41 年 6 軒 昭和 47 年 5 軒	昭和初期から 昭和 30 年頃まで 4 軒	中瀬河岸 昭和 28 年以降は 田町河岸使用	稲荷神社	2 月 15 日 10 月 15 日
上 殿	明治末期 40 軒 大正年間 35 軒 昭和 18 年 20 軒 昭和 41 年 6 軒 昭和 47 年 5 軒		ばんだ河岸 大正 11 年以降は 田町河岸使用	水神宮	1 月 12 日 10 月 22 日
下 殿	明治末期 23 軒 大正年間 30 軒 昭和 16 年 28 軒 昭和 41 年 11 軒 昭和 47 年 12 軒		八幡河岸 大正 11 年以降は 田町河岸	水神宮	1 月 12 日 10 月 22 日
江 川	明治大正 16 軒 昭和初期 9 軒 昭和 41 年 6 軒 昭和 47 年 6 軒		田町河岸	水神宮	1 月 12 日 10 月 22 日
田 町	明治末期 30 軒 大正年間 6 軒 昭和 41 年 8 軒 昭和 47 年 8 軒		田町河岸	巖島神社	2 月 11 日
出来野	明治大正 26 軒 昭和 21 年 29 軒 昭和 41 年 8 軒 昭和 47 年 8 軒	うなぎ 明治大正年間 6 軒 昭和 21 年 10 軒	出来野河岸	巖島神社	10 月 28 日
昭和町	明治大正 30 軒 昭和初期 35 軒 昭和 16 年 20 軒 昭和 41 年 11 軒 昭和 47 年 13 軒	昭和 34 年より 小型捲網 1ヶ統 小型底引 1ヶ統	出来野河岸	若宮八幡宮	10 月 20 日
塩 浜	大正年間 35 軒 昭和初期 30 軒 昭和 41 年 17 軒 昭和 47 年 18 軒	塩製造者 明治 40 年 10 軒 貝、うなぎ 昭和初期 15 軒	以前は運河を利用した が、昭和 20 年以降は長 八河岸を使用	神明神社 塩神社	10 月 16 日 7 月 10 日
四 谷	明治大正 40 軒 昭和 30 年 43 軒 昭和 41 年 24 軒 昭和 47 年 26 軒	貝 明治大正 13 軒 昭和初期 25 軒 昭和 25 年 8 軒 うなぎ、ボサアミ 昭和初期 10 軒	四谷河岸 昭和 20 年以降は、 長八河岸を使用	義田稲荷神社	10 月 20 日
台 町	明治大正 15 軒 昭和 16 年 7 軒 昭和 41 年 8 軒 昭和 47 年 6 軒	貝 明治～昭和 30 年頃 5 軒 うなぎ、ボサアミ 昭和初期 10 軒	台河岸 昭和 20 年以降は、 長八河岸を使用	若宮八幡宮	10 月 20 日
池上新田	明治大正 15 軒 昭和 21 年 20 軒 昭和 41 年 11 軒 昭和 47 年 11 軒	貝、うなぎ 明治大正 20 軒 うなぎ、ボサアミ 昭和初期 15 軒	池上新田河岸 昭和 20 年以降は 長八河岸を使用	汐留稲荷社	10 月 11 日
観音町	明治大正 45 軒 昭和初期 23 軒 昭和 4 年 6 軒 昭和 47 年 10 軒	貝 昭和初期 4 軒 うなぎ、ボサアミ 昭和初期 10 軒	観音河岸 昭和 20 年以降は 長八河岸を使用	若宮八幡宮	10 月 20 日
藤 崎	明治大正 35 軒 昭和初期 25 軒 昭和 36 年 4 軒 昭和 41 年 2 軒	貝、うなぎ、ボサアミ 昭和初期 2 軒	藤崎河岸 昭和 20 年以降は 長八河岸を使用	若宮八幡宮	10 月 20 日

【埋め立てによって失われた自然海岸】

川崎には今や「自然の渚」は残っていません。どこを探しても、工場と港湾のコンクリートの岸壁。そこで、「海をまた埋めて、人口の渚を復活させよう」なんていう動きもあるそうです。横浜の八景島には横浜市が造った人口の海浜がありますが、あのような物を川崎でもということでしょう。そのうちできるかもしれません。面白いですね。だったら最初から残しておけば良かったのにとおもいます。

もう一つの問題は、市民が自由に立ち入れる海岸が非常に限られているということです。多くの海岸が企業のもので、ほとんど立ち入ることが出来ません。市民の前から海が消えてしまい、なかなか海へ行けなくなった。戦後徐々に例外は出てきます。大川町の工業団地の所で運河の岸壁に立てるようになりました。東扇島の埋め立ては、港湾施設としての輸送基地建設が目的でしたが、市民に開放する場所も造ろうということで、いくつかの公園ができました。千鳥町の埋立地には千鳥公園があり、京浜運河を見ることができます。浮島にはヘリポートの基地や港のほか、浮島町公園ができ、釣り公園や市民健康の森があります。健康の森で活動をしている市民もいて、最近風力発電の施設ができ、発電した電気を東電に売っているそうです。しかし、これらは埋立地のほんの一部で、かつて自由に歩くことが出来た海浜はほとんど無くなってしまいました。

【埋め立ての歴史】

川崎の海浜の埋立ては、実は江戸時代から始まっています。小規模な開拓は江戸時代からあちこちにあったんです。資料2は私の友人の小泉茂造さんが作った図です。昔は埋立てで新しい土地を開発すると「新田」といいました。「新田」というと田んぼをイメージしがちですが、畑や塩田の場合も新田と呼びます。図にはその新田開発が出ています。黒い湾曲線は、近代になってから本格的に埋立てが始まった頃の海岸線です。田島の方へくるとだいたい産業道路に近くなってきます。

近代以降、公有水面を県に申請しますと、まずその地域の町や村の議会に諮問し、そこでOKが出れば県が認可するという形になりました。そうなる結構地元の人で、例えば15万坪の埋立て申請をして、権利を取得したりする人が出てきます。図中に「青木新田」というのがありますが、これは田島村の青木さんが果樹園にするという名目で、埋立て許可を得て、開拓し



資料4：明治初年の海岸線（太線）と新田
川崎区史研究会編『川崎区の史話』から

た地域です。後に浅野セメントが移転してきて、ここを買収します。それが今の浅野町で、現在第一セメントの工場があります。

大規模な埋め立ての最初は、浅野総一郎による浅野埋立です。今までとは規模が桁違い、150万坪という土地を一度に埋め立てました。鶴見川の河口から、元の田島村の海浜までのほとんどが戦前に埋め立てられています。戦時中以降は「大規模な埋立はもう民間に任せてたらずい」「公共機関がやらなければ」というムードが出てきて、県や市が埋め立て事業に係わるようになってきます。公営埋立事業が昭和3年に始まり、戦時中一時ストップし、戦後再び大きく推進されます。水江町・浮島町・千鳥町・東扇島などは公営の埋立地です。今や埋立地の比重は21,191平方kmですが、この数はまだ時おり増えていきます。浮島町の地先に市がゴミを埋め立てている所があり、整地されて川崎区の中に入っていきます。川崎市の面積は川崎区だけが少しずつ成長しているんです。

【面積の半分以上が埋立地の川崎区】

川崎市の面積は144,35平方kmで埋立地の面積はその14%です。川崎区は面積は40,25平方kmで7区中最大ですが、その約52.6%、半分以上が埋立地です。埋立地の大部分は工場や港湾施設で、広い土地をつかって、生産活動が行われています。日本の文化や生活を支えているものや世界に輸出されているものなどがつくられています。開講挨拶でもありましたが、やはり企業と市民との交流を図り、区の半分の土地で展開されている企業活動について、市民はもっと関心を持たなければいけないと思います。市民が身近に感じれば、誇りに思えるような物がいくつも出てきます。この臨海地帯はかつて日本の高度成長を支えたコンビナートだったんです。

確かに一時期は公害の問題も凄かったのですが、特に亜硫酸ガスについては厳しい規制が行われて克服されました。今、企業は公害やゴミを出さないよう、環境に優しい生産活動への取り組みを行っています。この新しい形の企業のあり方を、私たち市民はもっと見つめる必要があります。その上で、もう一度産業の町・工業の町として発展してきた川崎の姿をきちんと見直していく必要があるでしょう。

【浅野総一郎 生い立ちと実業家になるまで】

京浜工業地帯の埋立に果たした浅野総一郎の業績は大きなものがあります。この人は色んな面で大変ユニークな方です。嘉永元年に越中の国、藪田村、現在の富山県氷見市に生まれます。医者の子坊だったようですが、次男ですから家を出なくてはならない。23歳で一旗あげるんだと上京します。そして最初は御茶ノ水辺りで、夏場に氷水に色や甘味を付けて「ひゃっこいよ」といいながら売っていました。次に、千葉の竹林から竹の皮を沢山無料でもらってきて、包装材として売りました。昔は竹の皮に味噌や肉を包んでいました。その内、それではあまり儲からないから、もっと大掛かりなものとして、当時は産業廃棄物として捨てられていたコークスをもらってきて、工場に燃料として売りこみました。そのほか、横浜市の公衆便所の汲み取りを一手に引き受け、肥やしとして売ったり、コールタールをもらってきて石炭酸を抽出して消毒液をつくってコレラが流行った時に売

ったりしました。とにかく何でも元手はほとんどかけずにし金儲けをしたのです。後に彼は自伝の中で、『私は廃物利用の名人だ』『要らなくなった物を上手く活用して、それで大儲けした』と語っています。彼のやった埋め立て事業も廃物利用の最たるものでした。

さて、浅野は、渋沢栄一に巡り合い、実業家としてのきっかけを掴みます。渋沢は当時銀行の頭取等をやっている、産業界に大業を成していた人物でした。その渋沢に官営だった深川のセメント工場の払い下げに口を利いてもらい、浅野工場(後の浅野セメント工場)を設立します。明治政府は殖産工業政策の中、さまざまな模範工場を各地につくり、しばらくすると民間に払い下げるということをやっていた。富岡の製糸工場などもその例です。今の政府が国鉄や道路公団を払い下げるといようなことを、明治政府もかつて盛んにやっていたんです。きっかけを掴んだ浅野総一郎は、その後はどんどん事業を拡大させていきます。それだけ才覚もあったからの成功だったのでしょうか。

【浅野総一郎 埋め立て事業の動機】

明治 29 年、48 歳の時に浅野は東洋汽船を設立します。その時に航路の開発に、外国の港湾施設の視察をかねて欧米に出掛けますが、これが後の埋め立て事業の伏線になります。そこで浅野が見たヨーロッパの国々の港湾施設は、大型船が港の岸壁に横付けして、荷物の積み下ろしをしていました。一方当時の日本の港は、まだ横浜でさえも大型船が立ち寄れる岸壁がなく、船は沖合いに停泊し、荷物の揚げ下ろしには舢舨と呼ばれる小船を使って行かない、大勢の港湾労働者が肩に担いで運んでいました。

「京浜臨海地帯にヨーロッパ型の先進的な港湾施設をつくり、そばに工場も建て、港湾工業都市をつくりたい」と考えた浅野は、帰国後、川崎から横浜にかけての海浜を、お供を連れて調査に歩きます。帽子をかぶり、ワラジ履きで歩いてまわった当時の姿が、浅野学園の校庭の上に銅像になっています。電車から見えるあの銅像です。右はその銅像の写真です。台座の周囲には 50 以上の浅野財閥を象徴する会社名がずらっと書かれています。この銅像はそれらの会社の従業員たちがカンパして建てたそうです。そして銅像は、浅野が埋め立てた臨海地帯の方を見えています。



浅野学園の浅野総一郎像

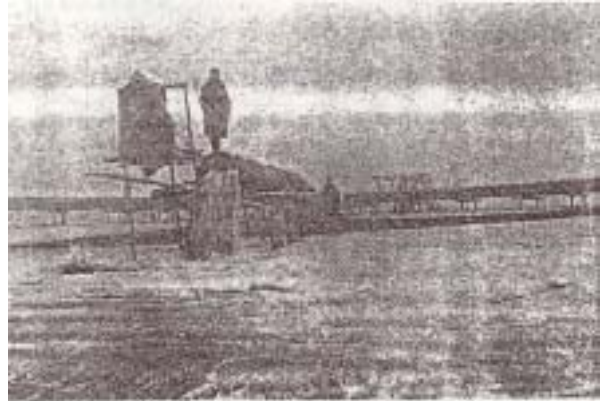
【浅野総一郎 埋め立て事業】

浅野の埋め立て事業は大正 2 年に着工され、昭和 3 年に出来上がります。動機の一つになったのは、浅野セメントの深川工場が撒き散らす白い灰が住民から非難を受け、住民と「明治の終わりまでには何とか解決する」と約束したこともありました。

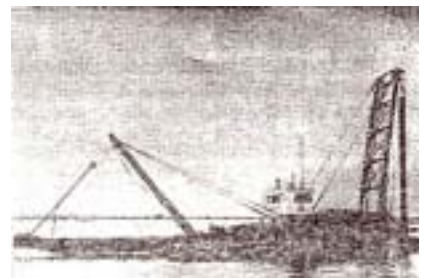
明治 44 年にまず大師河原村地先 20 万坪の埋め立てを出願します。しかし「灰を降らすような工場がきては困る」と大師河原の住民が猛反対。県も住民の危惧、反対を理由に許可を下ろしませんでした。そこで今度は、鶴見川近く、田島村の海浜を埋め立てようとし、地域で 10 万坪や 20 万坪という単位で埋め立ての権利を持っていた人たちから権利を買収して、全部で 150 万坪にまとめて申請します。県は「こんな大規模な埋め立て地は初め

てだから、資金的な裏付けが無ければ許可出来ない」といいます。そこで浅野は安田財閥の安田善次郎や渋沢栄一を口説いたのです。県も「そういう財界の大物も出資して、一緒にやるんだったら良いだろう」と許可を下ろします。そして明治45年に「鶴見埋立組合」という形で始まったのですが、「鶴見埋築組合」になり、やがて「東京湾埋立会社」と名前が変わっていきます。それが現在の「東亜港湾工業」に繋がっていきました。

どうやって埋め立てたか。素人が考えると「どこかの山を崩して土を運んできたんだろう」なんて考えてしまいます。確かに何も無い海を埋めるにはそうしなければならないのかもしれませんが、先ほどお話したように、当時の川崎の海は1.5~2kmの干潟が続く浅い海でした。そこで、まずコンクリートの大きな囲いを造りまして、周囲の砂を海水ごとポンプでどんどん吸い上げ、囲いの中へ堆積しました。右の写真、「鶴見埋築会社埋立ての実況」では、大きなホースから下へ海水まじりの砂が、ダーッと落ちている様子がわかります。この作業を行った浚渫船『大島丸』の写真もあります。浅野はイギリスから7隻の新鋭浚渫船を買って、それをフル稼働させました。掘った所は海が深くなるから、そこが運河になる。要するに運河を掘った要らない砂で土地を造成しました。浅野一流の廃物利用です。浅野は「金は海からすくう」と豪語しました。



鶴見埋築会社埋立ての実況



東京湾埋立株式会社所属の浚渫船“大島丸”
鶴見区史編集委員会編『鶴見区史』から

【埋立地の完成】

埋立地は面白いように売れ、企業家はどんどん工場を建てました。そういう時代でした。埋め立てる前から買うという気の早い企業もありました。日清製粉で、まだ海のうちから大川町の先端を買って、埋立てが出来ると否や、すぐに工場を建て、サイロを設け、接岸した大型船からサイロへホースでどんどん小麦を積み込んだのです。今の日清製粉は世界トップクラスの製粉会社です。その主力工場がその大川町の鶴見工場です。「川崎市大川町にあるのに、なんで鶴見工場なんだ？」と工場見学行った時、聞いてみますと「まだ海の時に買ったから鶴見だか川崎だか分からなかった。多分鶴見からやってくる人が多かったから鶴見工場になったんだろう」とのことでした。

浅野が埋立地に自分の家紋や自分が関係した人たちの名前を付けていたのは有名な話です。今いった「大川町」というのは、関係の深かった日本鋼管の二代目社長、大川平八郎の「大川」です。大川町の隣の白石町は娘婿の白石元次郎、鶴見の安善町は安田善次郎の略称で安善です。鶴見の末広町や扇町は浅野家の家紋の扇からとっています。

工場は色いろと見学されると、良く分かって面白いです。あの日清製粉も最近工場をリニューアルして、見学できるようになりました。ぜひご覧になると良いでしょう。ほとんど

ど機械化されているのですが、懇切丁寧に説明をしてくれます。グループで行かれることをお勧めします。ちょっと面倒なのが工場でなく、東京本社の方に連絡して予約しないとなりません。少なくとも以前はそうでした。帰りにお土産もあります。最近では工場見学OKという企業が増えています。味の素もそうです。

【次々造成された埋立地とやってきた工場】

こうして大型の貨物船が接続できる工業港湾都市が出来上がり、工場が次々やってきました。日本鋼管は少し例外的で、浅野埋立てが始まる前から川崎にきています。横浜の商人だった若尾幾造が埋め立てた若尾新田の一部を工場敷地として買ったのが最初で、後に周辺に敷地を広げていきます。その他、川崎に割合早くきたのは旭硝子で、埋立地が完成した翌々年の昭和5年に工場を完成させています。

その後、浅野造船、昭和肥料（昭和電工）、東京電燈、芝浦製作所、日本鑄造などの工場が次々とやってきます。それから日本石油、旭石油、三菱石油などの石油基地。流通基地としての埠頭である、三井埠頭や東洋埠頭などもきます。埠頭には倉庫なども形成されます。あと発電所。国鉄の発電所は今でも1つ残っていますね。大川町の一角にあった東電鶴見発電所の跡地は、大川町工業団地になっています。あそこの岸壁は現在綺麗に整備された公園になっていて、運河を望むことができます。

浅野埋立地の完成後は、公営埋立事業により、さらに大規模な埋め立てが行われていきます。埋め立ての経緯については、次頁の資料5をご覧ください。これらの図は先ほども紹介した川崎漁業協同組合の『海』の中の元図に私が補足しました。『海』はかなり前に出されたものですから、扇島や東扇島の埋立てが出てこないの、私が足しています。この図は明治末頃の海岸線です。昭和3年頃には浅野埋立地が鶴見川寄りに出来ています。

昭和20年、戦後にはだんだんと多摩川の方へ埋立地が伸びてきていて、昭和40年頃には浮島町まで出来、さらにその後、1990年頃には扇島と東扇島が出来ます。それぞれの埋め立ての着手と竣工の時期も一覧表になっています。面積等も示されています。

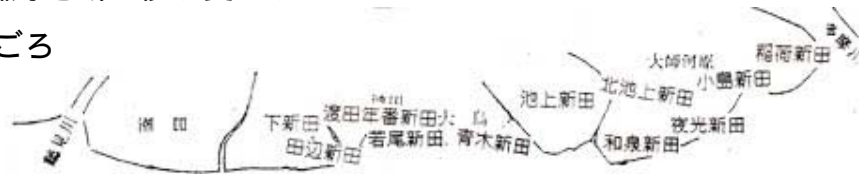
【戦後、高度成長を支えたコンビナート】

川崎は、戦時中から日本鋼管を中心とした鉄の町で、鉄鋼のコンビナートもありました。戦時中は、軍の需用にも応えて、いすゞ自動車のように軍用トラックなども造っていました。昭和の10年代以降から川崎の臨海工業地帯は重工業に変わり、戦後はますますその比重を強めて行きました。

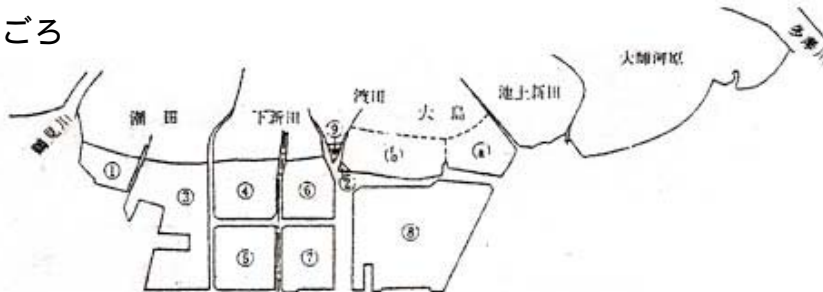
その過程で非常に大掛かりな日本鋼管の扇島埋立てがあったのですが、あれはもう廃物利用は出来ませんでした。どうしたかということ、千葉県から大きな船で土砂を運んできて埋め立てました。千葉県から山が1個無くなったなんて言われています。何せ川崎と横浜にまたがった515万㎡という巨大な埋立地を造成して、高炉2基を備えた東洋一の製鉄所が出現したんです。私も以前見学させてもらいました。あの圧延工場は長さが1.5kmくらいありまして、その中で真っ赤な鉄の塊が板に延ばされていきます。あの光景は下手な芝居なんかを観るよりも迫力があって面白いです。是非、工場見学をお勧めします。圧倒さ

資料5：川崎臨海地域の移り変わり

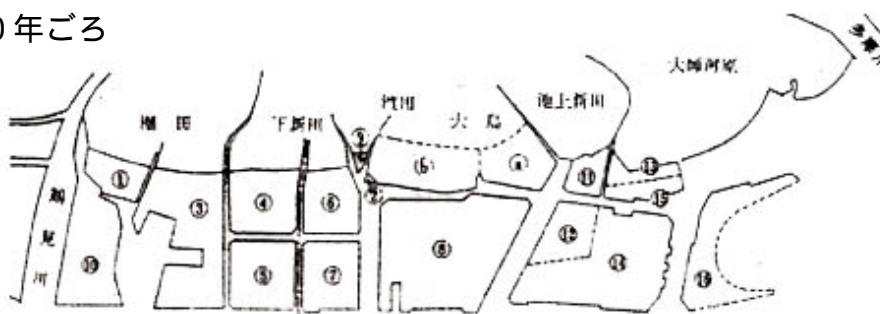
明治末年ごろ



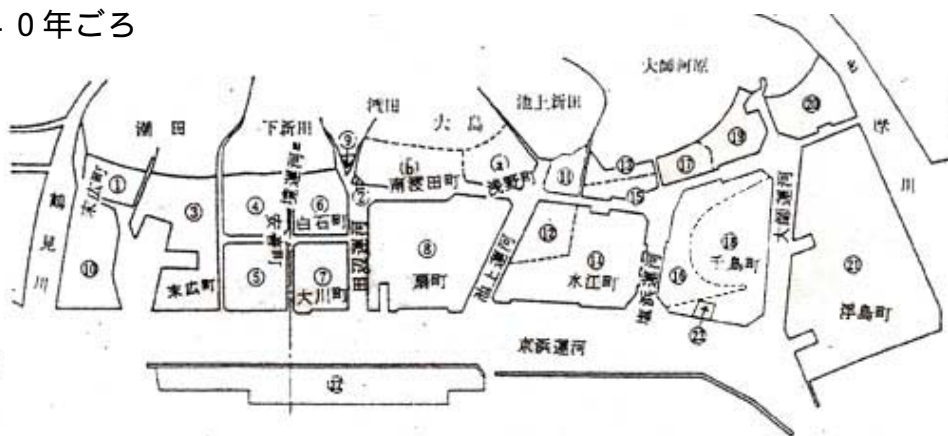
昭和3年ごろ



昭和20年ごろ



昭和40年ごろ



1990年(平成2年)ごろ



〔川崎漁業協同組合編『海』から〕

れます。

日本鋼管（JFE）はいつとき鉄冷えの時期に、主力を福山の方へ移すようになり、各所に遊休地が出来たりもしましたが、最近業績が回復したようです。本当に広大な敷地や工場を持っていて、企業の中だけで路線バスが走っています。私も同社のバスに乗せてもらって浜川崎の製鉄所から扇島の埋立地まで、他所様の土地を通らないで行ったことがあります。あれにはびっくりしました。（日本鋼管の社名は現在「JFE」といいますが、私はいいにくいので日本鋼管で済ませてもらっています。）

戦後、県が行った浮島町の埋立地には東燃化学を中心にした東燃コンビナートができ、その隣の千鳥町から夜光町にかけては日石化学を中心にした日石コンビナートができました。この2つの石油コンビナート群は高度成長期の日本を支える役割を果たしました。高度成長というのは、エネルギー革命とも言われ、それまで工場で動力源に使われてきた石炭が、石油に変わっていった時代でもありました。動力だけでなく、石油を原料にしたさまざまな生産物も生み出されました。

こうして鉄鋼コンビナートと石油化学コンビナートを中心にした重化学工業基地ができたのですが、工場の過密や公害の発生などもあり、法的な規制ができたりして、中の施設を変えていく必要性などが出てきました。また、景気の冷え込みなどもあって、他所に移転する企業も近年出てきています。ある石油企業なんかは操業を止めました。操業しない工場の跡地は、無人の施設群があるだけで本当に不気味です。

【臨海地帯の再生に向けて】

扇町で電車を降りて、臨海工場地帯の道路を歩いて行くと、大型のタンクローリーや自動車が、唸りを上げて走って行きます。あれにまずびっくりします。活気と思うか、騒音と思うかは、感じる人の違いですが、まず圧倒されます。とにかく全ての規模が大きいのです。街中とは全く違った景観が展開されます。なかなか普通の市民はああいう所には行きません。私は時々仲間を誘って、歴史散歩と称して扇町や大川町の辺り、旧浅野埋立地を歩くのです。皆びっくりしますね。是非皆さんもそういう所をご覧になって下さい。

最近、あの臨海地帯を再整備し、もっと活性化していこうと、川崎市が主導してさまざまな再開発のプランが出てきています。資料8は市がつくった川崎臨海部再生に向けた主要プロジェクトの資料です。元は色刷りです。臨海地帯の再生の問題については、私の領域から離れた分野なので、今後専門家の方にご講義頂いて、もっと認識を深めていかなければならないと思います。

今日は工業地帯の前史、臨海地帯が埋立てでどう変わってきたかというあたりに重点を置いて、お話ししました。私は臨海地帯がもう一度、市民が気安く行かれるような臨海地帯になってほしいのです。それには色いろな方策があるでしょう。市民に、もう一度海を取り戻したいと切に思います。ご清聴ありがとうございました。